

発表題目「観自在信仰を説く経典に関する一考察～『カーランダ・ヴェーハ・ストラ』を中心に～」
佐久間留理子（名古屋大学）

観自在信仰を説く基本経典の一つに『法華経』「普門品」が広く知られているが、インド文化圏では、「普門品」の信仰をさらに展開させた内容を有する経典が編纂された。その中でも注目すべきものに、7世紀頃に西北インドで成立した『カーランダ・ヴェーハ・ストラ』(KV)と、これを基に15世紀頃のネパールにおいて再編纂された『グナ・カーランダ・ヴェーハ・ストラ』(GKV)とがある。これらの経典は、観自在の生類救済の様々な説話を収めるとともに、観自在の精髓である六字真言の功德を賞讃するものである。本発表では、観自在信仰の展開という視点から、KVとGKVとを比較し、両者の相違点を指摘するとともに、GKVの成立背景やその編纂の意図について考察したい。それによって観自在信仰を説く経典が、インド本土からヒマラヤ山麓域のネパールへ、どのように展開し受容されたのか、という問題の一側面を解明できると考える。

KVの梵文には、7世紀頃のギルギット写本の断簡を使用したメッテ校訂本と12世紀の完本のネワール貝葉写本を使用したサマスラミ校訂本とがあるが、ここでは後者を底本として用いる。またGKVの梵文は、20世紀のネワール写本を用いたローケシュチャンドラ校訂本(LC)を底本とし、現存最古の15世紀のネワール写本等を参照する。KVとGKVとの章立てを比較した場合、GKV(LC)には、第1章、第18章(上述ネワール写本では17章)、第20章(同19章)が新たに付加されている。

これらの中、第1章「吉祥なる三宝の崇拜と賞讃の譬喩」には、KVにみられない三宝の性格が説かれており注目される。三宝は三位一体であるが、三宝の各々には、大乘的要素、密教的要素、ヒンドゥー神の要素が付加されている。例えば三宝の一つである仏はマハーブッダとも呼ばれ、より包括的な存在と考えられている。それは普賢の姿を有し、アーディブッダ(本初仏)であり五仏より生じ、大日の三昧を有する一方、マヘーシュヴァラであるとされる。これらの中、普賢は大乘的要素であり、五仏やアーディブッダは、中期・後期密教的要素である(初期密教的なKVには五仏等は説かれない)。またマハーブッダは、GKV(LC)の第4章(KV第1部第4章に相当)ではスヴァヤンブー(自ら生ずるもの)と呼ばれ(KVにはこの名は無い)、ヒンドゥーの神々を生成する観自在と同一視されており、創造神的性格を有する。さらに三宝は、GKV(LC)の第17章(KV第2部第2-7章に相当)では、KVにおいて説かれていた観自在の宇宙的身体や六字真言と新たに関連づけられている。このようにGKVの第1章に説かれる三宝はKVを再編する上で重要な役割を果たしている。

他方三宝をアーディブッダやスヴァヤンブー(ブッダ)と結びつけるという考え方は、GKVとほぼ同時代にネパールで編纂された『スヴァヤンブー・プラーナ』にも説かれる。これは、カトマンズ盆地の代表的聖地であるスヴァヤンブー仏塔に関する神話を説いた、地域色の強い聖典である。従ってGKVには、KVと比べてカトマンズ盆地における仏教の地域的性格が反映されているようである。

GKVの編纂時期(推定15世紀頃)に先立つ14世紀末頃、ネパールでは(ジャヤ)ステティマツラ王が登場し、当時仏教徒が多数を占めていたネワール族をカースト制度に組み込み、ヒンドゥー教化政策を押し進めた。その影響によって、仏教は、勢力を増大させるヒンドゥー教と共存する一方、密教的色彩を強めながらカトマンズ盆地に定着し地域化していった。GKVの編纂者は、このような宗教的状况下にあって、通仏教的な性格を有する三宝に新たな諸要素、即ち仏には、大乘的要素、中期・後期密教的要素、ヒンドゥー神の要素、スヴァヤンブー(ブッダ)の要素を、法と僧には、各々大乘的要素とヒンドゥー神の要素を付加するとともに、三宝をKVに説かれる観自在の身体や六字真言と関係づけることによって、より広汎な宗教レベルの信者獲得に向けてKVを再編しようとしたのではないかと考えられる。

キーワード 観自在、『カーランダ・ヴェーハ・ストラ』、ネパール